

24 防災訓練への要援護者の参加

研究所障害福祉研究部 北村弥生、高橋競、白神晃子

【目的】障害者が地域防災訓練に参加し、地域および避難所で快適な生活を送るための方法を明らかにすること。

【方法】所沢市の地域防災訓練(平成25年8月31日)を実施した3小学校に、通訳者、ガイドヘルパー、介助者合計14名を同行して聴覚障害者、視覚障害者、車いす利用者合計9名に参加を依頼し、参加状況を参与観察すると共に、有効性と課題を面接法で調査した。発達障害者には介助者として参加を依頼した。

【結果】

(1) 防災訓練は実際の避難に比べて防災教育としての情報提供が多かったため、聴覚障害者は筆記では不足し、手話通訳が必要であった。事前に詳細なプログラムを入手したことも有効であった。

(2) 災害時に有効と指摘された「アナウンスを画用紙に記録し掲示すること」は、内容の選別と掲示場所の選択が課題であった。

(3) 防災訓練は見学プログラムが多いため、視覚障害者は自主的に避難所の環境認知を行う必要があった。

(4) 車いす利用者が利用できる空間にゆとりのあるトイレは、参加した小学校には備蓄されていなかったが、手すりのある介護用ポータブルトイレとキャンプ用テントの組み合わせで、なんとか代用ができることがわかった。

(5) 障害者の存在を地域で認知し、地域住民と交流する機会として、防災訓練は機能した。例えば、支援者の様子を地域住民が見て支援方法を知ったり、地域のボランティアが名乗り出たり、障害者と自主防災組織役員が知り合うきっかけとなった。また、町内会の行事連絡をメールで受け取れるようになった視覚障害者もあった。

【来年度の予定】

(1) 次年度の地域防災訓練への参加では、当事者が各自で手話通訳者、要約筆記者、ガイドヘルパー、介助者を依頼し、事前に詳細なプログラムを入手し、主体的な参加ができるかを観察する。

(2) 避難時を想定した「アナウンスを画用紙に記録し掲示すること」は、再度、試行し、方法を確立する。

(3) 視覚障害者には、災害時に予想される設備の展示を触って確認する機会の選別と試行を行う。

(3) 車いす利用者が利用できるトイレの設置を防災訓練のプログラムに取り入れる働きかけを行う。

(4) 地域のボランティアと当事者が主体的に参加し防災訓練で役割をもつことを促し、障害者による地域での活動の発展を観察する。